

音楽の行方

赤津将大

あの「字路を

右に曲がると風の遊歩

横顔はたくさんのことを後ろに流した

どこもかしこもあまりに透けて

風が泣いた日

風は物を貫いて 表情もなく手荒に消し

白 黒 青 の盲いた線ばかりがあちこちで蠢いて

そのなかで遠く

彼はやさしく立っていた

砂漠を柔らかく裏返す

赤い風が吹いた日

生々しいのに心地よく

通過すると 彼は秋みたいに削れていた

そこに確かな季節はなく

口に残る鉄の味は

さっぱり頭上へ霧消した

世界が窪みをめがけて反り返る

すり鉢状の頭上が重く

右に左に天井よりも大きな背中がある

汚い意図や目的の純粹な歪みが

目の前で人体に浮かび 数え挙げられ

食卓で口に物を運ぶ自分が恐ろしく気持ち悪くて

ずらした椅子が倒れる

自分だけは情けを持って美しくありたいと願う余裕もなく
背中を捨てようと どんどん道を歩き

冷たいコーヒーで想念のすべてを飲み下しながら

どんどん道を歩き

緞帳が体を真っ二つに引いて

風が明けると

遠くのほうにぼつんと

動物たちの深い茂みで

一番汚くわたしが倒れていた

風の街

あの「字路を

左に曲がると水と星の幻が

道に 電柱に 車に

人に 木に 風に

宿る

わたしがたくさん書いた土地

遥か遠くから広大に聴こえる

石琴をうち鳴らすカラスの姿

ひとはそれを昔と言うだろう

薄暗い緑の窪みで

髪は暴れて タキシードを乱して

青年がピアノを弾く

すでに顔はなく 天才である

ひとはそれを嘘と言うだろう

この脚は地面の筋肉を感じている

水と幻夢の気体でできたこの星は地球ではない

星が瞬きし終えた後に

この手は白く地球の光でできている

ふっと揺らすと

第七世界から届いた光がその手を再構成している

知っている この白い手はわたしの手のまま

母から生まれ

幾多の穢れと美しい心を知り

強く消えながら うっすらあらわれる

孤児たちの全いのち

わたしはこの手をまだ伸ばす

わたしはこの眼をまだ開く

知っている わたしは巨人ではない

一度 わたしよりわたしに似たやさしい影を確認する

わたしは使い古された一人称ではない

だから怖い

だから寒い

それでもヒトを離れて

風より透けていたい日はある わたしを

広大なわたしは永遠に見続けてきている

照り返す

星の街

この「」字路を

今日はどこちに曲がろうか

それとも塀を越えてみようか

ここからそれほど遠くないところで

わたしが迷っている